

『詩經』に於ける「鹿」に就いて

遠藤 寛朗

(一)

近年の『詩經』研究では、從來、諸侯と解されていた「客」「賓客」なる語が、祖靈やその尸を指す宗教用語(注一)であることが明かになり、更には『詩經』諸篇の「鳥」が祖靈の表象(注二)、「馬」が神靈や祖靈神の乗り物(注三)として「魚」が豊饒多産の呪物(注四)であることが解明されて來た。上記の「賓客」や「馬」「鳥」「魚」と同様、宗教用語或いは呪物として『詩經』に見られる語が「鹿」である。「鹿(和名シカ)」は、召南・野有死麋篇、秦風・駟驥篇、豳風・東山篇、小雅・鹿鳴之什・鹿鳴篇、小雅・南有嘉魚之什・吉日篇、大雅・文王之什・靈臺篇等に散見する。

「鹿」に就いては、既に赤塚忠(注五)や金田純一郎(注六)が、馬と同様に祖靈を表象する神聖な動物であり、我が國にも酷似した習俗があったことを言及している。

小雅・鹿鳴之什・鹿鳴篇(一六一)には

第一章 呦呦鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟吹笙。吹笙鼓簧、承筐是將。人之好我、示我周行。

『詩經』に於ける「鹿」に就いて

第二章 呦呦鹿鳴、食野之蒿。我有嘉賓、德音孔昭。視民不忮、君子是則是傲。我有旨酒、嘉賓式燕以敖。

第三章 呦呦鹿鳴、食野之芩。我有嘉賓、鼓瑟鼓琴。鼓瑟鼓琴、和樂且湛。我有旨酒、以燕樂嘉賓之心。

(押韻 ○||耕部 △||陽部 □||宵部 ◎||侵部)

〔訓讀〕

第一章 呦呦と鹿鳴き、野の芩を食む。我に嘉賓有り、瑟を鼓し笙を吹く。笙を吹き簧を鼓し、筐を承げて是に將む。人の我を好し、我に周行を示せ。

第二章 呦呦と鹿鳴き、野の蒿を食む。我に嘉賓有り、德音に孔だ昭けり。民に視すに忮からざるは、君子是れ則り是れ傲ふ。我に旨き酒有り、嘉賓式て燕し以て敖ぶ。

第三章 呦呦と鹿鳴き、野の芩を食む。我に嘉賓有り、瑟を鼓し琴を鼓す。瑟を鼓し琴を鼓し、和樂し且つ湛しませしめん。我に旨き酒有り、以て嘉賓の心を燕して樂ばしめん。

〔日本語譯〕

第一章 ユウユウと(祖靈の表象たる)シカが鳴き、野原のカワラバハコを食べています。我(少女の巫)のもとに祖靈がおります、(少女の巫は)瑟を奏で笙を吹きます。笙を吹き簧を奏で、(供物の入った)四角いかごを兩手で捧げて(祖靈を)祀ります。あなた様(祖靈)は我(少女の巫)を愛して、我(少女の巫)に正しい道(一族の繁榮)を示し給え。

第二章 ユウユウと(祖靈の表象たる)シカが鳴き、野原のクソニンジンを食べています。我(少女の巫)のもとに祖靈がおります、(祖靈の下される)お恵みはとても輝かしい。民(我々の一族)に示される(お恵みは)とても厚く、(祭祀の度に來臨される)祖靈はこれに倣います。我(少女の巫)に美味しいお酒があ

り、祖靈は（少女の巫とともに）宴をして神遊びします。

第三章

ユウユウと（祖靈の表象たる）シカが鳴き、野原のヒジハを食べています。我（少女の巫）のもとに祖靈
がおります、（少女の巫は）瑟を奏で笙を吹きます。瑟を奏で笙を吹き、祖靈を樂しませます。我（少女
の巫）に美味しいお酒があり、祖靈の心を神遊びをして（私のもとに留まらせ）ます。

^{（注七）}とあつて、ここでは祖靈の象表として見えている。この場合には我（少女の巫祝）が祖靈（男神）を招く降神儀禮の形である。中國古代に於いて「鹿」が祖靈や神靈の來臨の象徴であつたことは疑いはない。『詩經』中に見える女神は、とりわけ「靜女」^{（注八）}や「尹人」^{（注九）}にあつては、少女の巫祝が扮する水神であつた。靜女篇のように四頭立ての馬車に、女神の尸たる少女が乗るといつた行爲は「鹿」にはない。では、女神の尸（水神）或いは少女の巫祝と「鹿」とは、如何なる關係があるのだろうか。例えば「狐」^{（注一〇）}は、女神の尸たる少女として謠われていたが、「鹿」も女性或いは女神の表象であり、それ故に女性が乗ることが儀禮的にもなかつたのではなかつたか。

本小論では、上記の點を踏まえ『詩經』に於いて、「鹿」が「馬」の如く、祖靈や神靈の乗り物ではなく、少女の扮する女神との間に於いて、如何なる呪物として扱われているのかを各詩篇の解釋及び「鹿」と類似する呪物と對比しつつ検討を試みるものである。

(二)

「鹿」は中國では、約二萬年以上前から、野牛・狐・兎・野猪など共に狩獵の獲物とされていたことは周知の如くである。そうした食料を獲得する爲の狩獵は、少數の民族では顯著であつたが、それら狩獵民族が集團となるとその目的が、

祭祀儀禮の爲の狩獵、つまり祖靈や神靈に捧げる獲物を得ることに變遷していった。そうした祖靈神や神靈に捧げる獲物として見えている「鹿」は、どのように謡われているのであろうか。

そこで、小雅・南有嘉魚之什・吉日篇（一八〇）を考察する。

第一章 吉日維戊。既伯既禱。田車既好。四牡孔阜。升彼大阜。從其羣醜。

第二章 吉日庚午。既差我馬。獸之所同。麀鹿麀麀。漆沮之從。天子之所。

第三章 瞻彼中原。其祁孔有。儻儻俟俟。或羣或友。悉率左右。以燕天子。

第四章 既張我弓。既挾我矢。發彼小豸。殪此大兕。以御賓客。且以酌醴。

（押韻 ○||幽部 △||魚部 □||東部 ●||之部 ▲||脂部）

以下に語釋を施す。○「吉日」は、祭祀やその他の典禮を行うに適した日を指す。○「維戊」は、馬瑞辰が「今按、日謂十干、辰謂十二支。十干五剛五柔、甲、丙、戊、庚、壬五奇爲剛日、乙、丁、己、辛、癸五偶爲柔日也。十二支六陰六陽、申、子、亥、卯、辰、未爲六陰、寅、午、巳、酉、戌、丑爲六陽也。毛傳言外事用剛日、則以庚爲吉」と言う如く、十干の奇數日を剛日とし、偶數日を柔日を指す。また「剛日」には外事が行われていたが、これは『禮記』曲禮上に「外事以剛日、內事以柔日」とあるに據る。この記事に就いて、孫希旦が「愚謂外事謂祭外神、內事謂祭內神。下篇曰、踐阼臨祭祀、內事曰嗣王某、是也。田獵出兵、亦爲外事、故詩言吉日維戊、既伯既禱。吉日庚午、既差我馬、春秋甲午治兵、皆剛日也」(『禮記集解』)と言うように、狩獵や出兵も外事である。○「既」は、裴學海が「既猶其也。既與其爲牙音雙聲字。故既訓其。其亦訓既」と言う如く、助字の其、「そーレ」と讀む。○「伯」は、毛傳に「伯、馬祖也」と言う。馬の祖神を指すとす。神靈を指すのは正しいが、馬祖かどうかここでは分からない。第四章に「以御賓客、且以酌醴」と、

「賓客」の語が見られるので、祖靈を指すと考えられる。○「禱」は、徐熹が「説文」、示部、稠、禱牲馬祭也。従示、周聲。詩曰、既禱既稠。今作既伯既禱。按、禱字云、告事求福也。従示、壽聲。是稠、禱異義」(『讀書雜釋』)と云うように、幸いを祈願する意。○「田車」は、狩獵の車。○「四牡」は、四頭立ての馬車。○「孔阜」の「孔」は、秦風・駟驥篇の語釋参照。○「阜」は、『説文』に「阜、大陸、山無石者」とある。丘、土山意。○「從」は、馬瑞辰が「此詩從其羣醜、漆沮之從、從、逐也、謂驅逐也」と云う如く、追う意。○「羣醜」は、毛傳に「醜、衆也」とあり、鄭箋に「從禽獸之羣醜也」とあるように、禽獸の群れ。○「差」は、毛傳に「差、擇也」とあり、選ぶ意。○「獸之所同」の「所」は、裴學海が「所猶其也」と云う如く、助字の其で、「それ」と讀む。「同」は、劉運興が「詩曰、獸之所同、麀鹿麀麀、舊讀同如訓聚、失之。今案同字本當作全、形近譌而爲全、廣韻、東韻曰、全、同古文。全者奉也。説文、入部曰、全、完也。完猶奉也。……爾雅、釋言曰、奉、獻也。吉日述周王狩獵、詩曰獸之所同(全、奉)、乃謂虞人合聚林澤之獸以奉侯逐射之事、逐射也。秦風、駟驥曰奉時辰牡、辰牡孔碩。公曰左之、舍拔則獲。言秦侯之狩獵耳。虞人合聚林澤之獸以奉侯逐射之事、諸侯與天子不異。故彼曰奉時辰牡、此曰獸之所同(全、奉)、其實一也。由駟驥之奉、知吉日同字必爲全(奉)字譌焉」(『詩義知新』)と云う如く、奉の譌體で、ささげる意。○「麀鹿」は、毛傳に「鹿牝曰麀」とあり、牝鹿のこと。○「麀麀」は、毛傳に「麀麀、衆多也」とあり、數の多い様を形容する語。○「漆沮」は、毛傳に「漆沮之水、麀鹿所生也」とあり、馬瑞辰が「縣詩自土漆沮、土當作从齊詩作杜、謂杜陽也。沮當从王尙書説讀徂。自土漆沮猶云自西徂東。蓋太王自邕遷岐、必自杜陽度漆水」と云う。ここでは、漆水と沮水で岐周の地を流れる川の名。○「天子」は、毛序に「吉日、美宣王田也」とあるが、屈萬里が「按、此自是美天子田獵之詩、惟天子是否爲宣王、未能遽定」と云う。祭祀の主催者であるが、宣王を指すのか分からない。○「所」は、高亨が「所、此處。此句言該地宜爲天子田獵之所」と云う如く、天子が獲物を待ち受けるところ。○「中原」は、程俊英等が「中原、原中、指原野」とする如く、原野、平原のこと。○「其祁孔有」は、金其源が「傳、祁、大也。箋云、祁當作麀、麀、牝也、中原之野甚有之。釋文、毛巨私反、又止之反、鄭改作麀、音辰。

爾雅、釋獸、麋、牡麋牝麋。邢疏逕引作麋。而陳氏詩毛傳疏證謂祁與頌同、故訓大。大謂原野廣大也。孔、甚也。原田之中其地廣大、物又甚有。箋改祁爲麋、正義據爾雅某氏注引詩作麋、本三家詩。按、說文、奈、大也。羣經正字、謂今經典凡介字爲大義者、蓋卽奈字之省。方言、獸無耦曰介。注、傳曰逢澤有介麋。左傳杜注云、介、大也。是傳訓祁爲大、猶言介也。介則箋曷云當作麋。曰說文、麋、牝麋也。麋、牝鹿也。上文、麋鹿麋麋。傳云、鹿麋曰牝。麋麋、衆多也。其祁卽承牝鹿、謂牝鹿之介者也。孔有卽承麋麋、謂牝鹿之衆多也。『讀書管見』と云う如く、大きい牝鹿が澤山群がっている様。○「儻儻」は、李雲光が「案儻儻爲疾行兒」と云う如く、速く駆け巡る様を形容する語。○「俟俟」は、李雲光が「案俟俟爲徐行貌」と云う如く、ゆっくりと歩く様を形容する語。○「友」は、『廣雅』に「友、樂也」とある如く、樂しむ意。○「率」は、林義光が「率猶驅也。胡承珙云、率有驅義、故六朝人每以驅率連文」と云う如く、驅ける意。○「燕」は、程俊英等が「燕、通宴、樂」とする如く、宴の假借字で樂しむ意。○「發」は、集傳に「發、發矢也」とある如く、矢を放つこと。○「殪」は、毛傳に「殪、壹發而死」とあり、矢で仕留めること。○「小狝」「大兕」は、陳奐が「小狝、微禽也。大兕、大禽也」とする如く、小さい獸を小狝と言ひ、大きい獸を大兕と言ふ。○「賓客」は、祖靈の尸を指す。○「醴」は、『漢書』楚元王傳「常爲穆生設醴」の師古注に「醴、甘酒也」とあり、また『說文』に「醴、酒一。宿熟也」とある。一晚で作る甘酒のこと。周頌・臣工之十・豐年篇「爲酒爲醴」に、孔穎達が「爲酒爲醴者、祭祀之醴、亦用稅物。信南山云、曾孫之穡、以爲酒食、畀我尸賓、是用稅物之文也」と云う如く、その宗廟祭祀で祖靈に供する酒である。となる。

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 吉日維れ戊、既れ伯し既れ禱る。田車既れ好、四牡孔だ阜いなり。彼の大阜に升り、其の羣醜を従ふ。

第二章 吉日庚午、既れ我が馬を差ぶ。獸の所れ同げん、麋鹿麋麋として。漆沮に之れ従はん、天子の所に。

第三章 彼の原を瞻れば、其の祁孔だ有し。儻儻たり俟俟たり、或いは羣がり或いは友しむ。悉く左右に率け、以

て天子を燕たのしましめん。

第四章 既それ我が弓を張り、既それ我が矢を挾む。彼の小貊せうはを發はつし、此の大兕たいじを殪たふす。以て賓客すずに御みめ、且かつ以て體れいを酌くまん。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 戊の祭祀を行う吉き日、祖靈神に幸いを祈願します。狩りの車も良く整い、それを牽引する四頭の牡馬もたくましい。あの大きな丘に登りまして、獸の群れを追いかけてぐる。

第二章 庚午の祭祀を行う吉き日、選えび整とれた狩りの馬。捕とらえた獸を捧たげましょう、牝鹿と牡鹿とを大量に。漆沮の邊りまで追いかけましょう、祭祀の主幸者たる天子の居ますところまで。

第三章 あの平原の邊りを見れば、大きい牝鹿が澤山群がっています。或いは驅けまわり、或いはゆるりと歩き、或いは群がり或いは雄雌の鹿が楽しんでます。みな左に右に追おい立てて、天子を樂たのしませます。

第四章 我が弓を張り、我が弓を手た挟む。あの小さき獸を一矢で仕留め、この大きな獸を一矢で仕留めます。そして祖靈神に捧たげ、甘酒を供せん。

となる。毛序や集傳は、宣王の狩りを贊美する詩であるとするが、これは「天子」を宣王に比定した曲解である。第四章「賓客」を諸侯としたことに起因すると思われるのであるが、語釋で見た如く、祖靈を指すのであるから吉日篇は、祖靈祭祀詩である。さて「鹿」に注目すると、牡鹿と牝鹿が見え、とりわけ「其祁孔有おほ（其の祁孔おほだ有おほし）」とあるに據れば、

「牝鹿」が重要視されていたようである。

秦風・駟驥篇（二二七）には、牝鹿が祖靈神への供物として顯著である。

- 第一章 駟驥孔阜。六轡在手。公之媚子、從公于狩。
第二章 奉時辰牡、辰牡孔碩。公曰左之、舍拔則獲。
第三章 遊于北園、四馬既閑。輶車鸞鑣、載獫歇騶。

(押韻) ○|| 幽部 △|| 鐸部 □|| 元部 ◎|| 宵部

以下に語釋を施す。○「駟驥」の「駟」は、陳奐が「駟、當作四、四馬曰駟。若下一字爲馬名、則上一字作四不作駟。四驥孔阜、猶云四牡孔阜耳。凡碩人、小戎、四牡、采芾、杖杜、六月、車攻、吉日、節南山、北山、車牽、桑柔、崇高、烝民、韓奕、皆曰四牡、此詩曰四驥、載驅、六月曰四驪、四牡、裳裳者華曰、四駱、采芾、曰四騏、車攻曰四黃、大明曰四駟、皆謂四馬也」と言う如く、四の假借字で、四頭馬。「驥」は、集傳に「駟驥、四馬皆黑色如鐵也」と言い、阮元の校勘記に「正義本當是鐵字、鐵爲驥之借、而石經初刻依之。上譜正義及騶虞、車攻、吉日等正義多引作鐵、是其證」とある如く、鐵の假借字で、鐵のように黒い様。「駟驥」は四頭の黒馬のこと。○「孔」は、集傳に「孔、甚也」とあり、はなはだの意。「阜」は、毛傳に「阜、大也」、集傳に「阜、肥大也」とあり、王先謙が「韓詩訓阜爲肥。肥、壯一類之辭、其義無異」とする如く、大きい意。○「六轡」の「轡」は、手綱のことで、孔穎達が「正義曰、每馬有二轡、四馬當八轡矣。諸文皆言六轡者、以驂馬內轡納之於缺、故在手者唯六轡耳」と言う。四頭立ての馬の手綱が八條ではなく六條であるというの、横一列の馬四頭は、外側の二頭を副え馬(驂馬)と言ひ、内側の二頭を服馬と言うが、この驂馬の内側の缺(轡をつなぐ轡)に掛けて一條としたものである。○「公」は、大雅・生民之什・既醉篇「公戸嘉告」の鄭箋「公、君也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、祭統、尸在廟中則全於君。爾雅皇、公皆訓爲君。詩或言皇戸、或言公戸、皆取尸在廟則全於君之義、不取諸侯稱公之義」と言う如く、本來は宗廟において祖靈が憑依する戸のこと。○「媚子」は、陳喬樞が「疑魯詩之義以媚子爲嬪妾之稱、故劉向引之」(『三家詩遺說考』)と言う。「公(祖靈)」に仕える女性。○「于」は、「こ」「こ」「こ」

と讀む意味の無い助字。周南・桃夭篇「之子于歸」の「于」に同じ。○「時」は、毛傳に「時、是」とあり、陳奐が「時、是、爾雅、釋詁文。十月之交、文王、韓奕、訪落傳並訓時爲是。時、是同聲、古文以時爲是字也」と言う如く、助字の「是」で、「こゝろ」と讀む。○「辰」は、胡承珙が「吉日其祁孔有、祁當作麇。麇、麇牝也。此辰牡當作麇牡」と言い、馬瑞辰も「瑞辰按、辰當讀爲麇。……說文、麇、麇牝也」と言う如く、麇の假借字で牝鹿、「牡」は牡鹿のこと。○「孔碩」は、陳奐が「孔碩、猶孔阜」と言う如く、「孔阜」と同じで、甚だ大きい意。○「左之」は、余培林が「按禽獸心臟在左、故射其左乃能中殺也。此蓋公對媚子言之」とする。獸の心臟は左側にあるので仕留めるために、左を射てと媚子に對して言つたのである。○「舍」は、『論語』述而篇「舍之則藏」の『釋文』に「舍、放也」とある。放つ意。○「拔」は、毛傳に「拔、矢末也」とあり、鄭箋に「拔、括也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、說文、發、射發也。从弓、發聲。古者以發矢爲發、其矢所發之處亦謂之發。發與拔古同聲通用。……傳言拔爲矢末、箋以爲括。據釋名、矢末曰括。括、會也、與弦會也。是傳、箋義相成。蓋言其弦會處曰括、言其爲矢所發之處則曰發、而字通作拔也。傳、箋訓拔爲矢末之括、正以拔卽發之借字也耳。又按說文云、矢、弓弩矢也。从入。象鏑、括、羽之形」と言う如く、矢筈。矢の上端の弦を受ける羽飾りがある部分。○「獲」は、陳奐が「獲、言中禽也」と言う如く、矢を命中させて獲物を狩ること。○「遊」は、少女がゆつたりと巫舞して神靈を招くこと。(注一一)○「北園」は、陳奐が「古者田在園囿中、北園當卽所田之地」と言う如く、狩獵の地とするが、大雅・文王之什・靈臺篇「王在靈囿」の「靈囿」と同様に、神聖な祭場である。○「四馬」は、陳奐が「四馬、卽四驥」と言う。第一章の「駟驥」に同じ。○「既閑」は、余冠英が「既閑、言獵罷不再驅逐、顯得從容閑暇」と言う如く、狩獵を終えて、ゆつたりとする様。○「輶車」は、毛傳に「輶、輕也」とあり、鄭箋に「輕車、驅逆之車也」とある。狩獵に用いる馬車。○「鸞鑣」は、林義光が「毛萋蕭傳云、在軾曰和、在鑣曰鸞。鑣、馬銜兩端出於口外者也。鸞在鑣者、繫於銜之兩端、故一馬各二鸞」と言う如く、馬のくつわの兩端にあるので、馬一頭につき二つある。○「獫狫驕」は、毛傳に「獫狫驕、田犬也。長喙曰獫、短喙曰狫驕」とあり、集傳には「獫狫驕、皆田犬名。長喙曰獫、短喙曰狫驕。以車載

犬」とある。「獫」「歇驕」は、獵犬のこととなる。

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 駟驥孔だ阜いなり、六轡手に在り。公の媚子、公に従ひて手に狩す。

第二章 時の辰牡を奉げ、辰牡孔だ碩いなり。公之を左せよと曰ひて、拔を捨てば則ち獲たり。

第三章 北園に遊び、四馬既れ閑たり。輶車鸞鑣、獫と歇驕とを載す。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 四頭の黒馬はたくましく、手綱は手の中に。青年（祖靈神）の付き添いの少女は、青年（祖靈神）のお伴で狩りをします。

第二章 捕らえた牝鹿を祖靈神に捧げましょう、とても大き立派な牝鹿を。左（心臓）を射てと青年（祖靈神）の聲に、見事仕留めた獲物を。

第三章 神聖な祭場の北園で少女は巫舞し、四頭の馬はのんびり留まる。狩りの車の鈴の聲、車に載せた狩りの犬となる。この詩も毛序、集傳ともに襄公を贊美する詩であるとする。これは「公」を襄公に比定した爲である。語釋で見たと如く、祖靈の尸の青年を指す語であり、「媚子」は、その青年に側にいる少女の巫祝である。さて、ここにかかる少女が狩獵を行うのが問題となるが、顧頡剛に據ると古代の女子は必ずしも弱い存在ではなく、武器を持って兵役に従事したり狩獵を行っていた。^(注一三)この詩でも祖靈に捧げる獲物は「牝鹿」である。しかも特に大きいものが好まれていた。

大雅・蕩之什・韓奕篇（二六一）第五章に「孔樂韓土、川澤訏訏。魴鱖甫甫、麀鹿嘒嘒。有熊有羆、有貓有虎（孔だ樂し韓土、川澤訏訏たり。魴鱖甫甫たり、麀鹿嘒嘒たり。熊有り羆有り、貓有り虎有り）」とあり、多くの「麀鹿（牝鹿）」

がいることは、他の魚や熊、虎等とともにその土地の豊饒の象徴であった。鄘風・定之方中篇にも「駉牝三千」とあるように、牝馬が吉祥とされていたことを踏まえると、「牝」が特に重寶されたのは、類感呪術的に女性の多産や豊饒を象徴しているのである。

次いで、大雅・文王之什・靈臺篇（二四二）を考察する。

- 第一章 經始靈臺、經之營之。庶民攻之、不日成之。
- 第二章 經始勿亟、庶民子來。王在靈囿、麀鹿攸伏。
- 第三章 麀鹿濯濯、白鳥騫騫。王在靈沼、於物魚躍。
- 第四章 虞業維樅、賁鼓維鏞。於論鼓鍾、於樂辟廡。
- 第五章 於論鼓鍾、於樂辟廡。鼉鼓逢逢、矇瞍奏公。

（押韻 ○||耕部 △||職部 □||之部……職之通韻 ●||藥部 ▲||東部）

以下に語釋を施す。○「經始」は、馬瑞辰が「按、經與基雙聲。爾雅釋詁、基、始也。釋言、基、經也。經亦始也。鬼谷子抵巇篇經起秋毫之末、注、經、始也。是經、始同義之證。經始猶言經起、起亦始也。賈子禮容篇亦云、基者、經也。經始又如書言周公初基、周語言自后稷之始基靖民、韋注基訓爲始、皆一字同義」と言う如く、「經始」の二字で始める意。具體的には、『詩輯』に「言創建也」とある如く、靈臺の創建を始めること。○「靈臺」は、赤塚忠が「靈臺篇は、降神儀の樂歌であつて、靈臺は神を降ろして憑りつかせる『土』壇にはかならない。神靈の降る臺壇であるから靈といったのであり、土壇であるから庶民が集まつてこれを築くと言っているのである」と論ずる如く、降神儀禮を行う土壇のこと。○「經之營之」は、朱廣祁が「經營二字耕部疊韻、其實是連綿字」（『詩經』雙音詞論稿）と言う如く、「經營」に同じ。

「經營」は『尙書』召誥篇の正義に「規度城郭郊廟朝市之位處也」とあるように、城郭や宗廟の位置を計測する意。○「庶民」は、祝敏徹等が「庶民、群衆」(『詩經譯注』)と言う如く、群衆を指す。○「攻」は、毛傳に「攻、作也」とあり、高亨が「攻、造也」とする如く、つくる意。○「不日成之」は、『詩輯』に「不日、不多日也。今人言不久爲不日」とある如く、何日もかからないこと。○「勿」は、王引之が「勿、無也、莫也。常語。廣雅曰、勿、非也。詩靈臺曰、經始勿亟」(『經傳釋詞』)と言う如く、否定詞「非」に同じ。○「亟」は、鄭箋に「亟、急也」とある如く、急ぐ、急がせる意。○「子來」は、俞樾が「蓋古音子與滋同、故周易、明夷、六五、箕子之明夷。釋文曰、今易箕子作芟滋。此文子字亦當讀爲滋。說文、水部、滋、益也。……經始勿亟、庶民子來、言文王寬假之、而庶民益來也、因假子爲滋。……一切經音義卷三曰、滋、古文仔。同是滋字、古文有從二子者、則子來之爲滋來無疑矣」(『羣經平義』)と言う如く、滋の假借字で、「滋來」で大勢やつて來る意。○「王」は、諸説に文王とするが分らない。祭祀の主宰者。○「靈囿」は、毛傳に「囿所以城養禽獸也」とある。動物を囲い飼育する場。○「麀鹿」は、大きな牝鹿。○「攸」は、裴學海が「攸猶是也」「ここニ」と讀む助字。○「濯濯」は、集傳に「濯濯、肥澤貌」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、爾雅釋詁、濯、大也。韓詩、濯、美也。孟子趙注、獸肥飽則濯濯。廣雅、肥也。蓋本三家詩。肥與美、大義竝相近。據說文、濯、直好兒、廣雅釋詁、濯、好也、釋訓、濯濯、好也。濯濯、當卽濯濯之假借」と言う如く、大きく美しい様を形容する語。○「白鳥」は、毛奇齡は鶴と解し(『讀詩傳鳥名』)ているが、江村如圭が「大雅靈臺ノ章ノ白鳥ヲ直ニ指シテ鶴トス、然レドモ白色ノ鳥ヲ廣ク總ヘテ見ルベシ、故ニ朱傳モ註ヲ加ヘズ」とするにより、白い鳥の總稱。○「鬻鬻」は、毛傳に「鬻鬻、肥澤也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、說文、鬻、鳥白肥澤兒。音義與睢近。說文、睢、鳥之白也。何晏景福殿賦、睢睢白鳥、睢睢卽鬻鬻也。……當以毛詩作鬻鬻爲正字」と言う如く、白鳥の白さを形容する語。○「靈沼」は、毛傳に「沼、池也」とある。「靈臺」と同じく、神靈が來臨する池のこと。○「於」は、林義光が「於、歎詞」と言う。歎辭。「ああ」と讀む。○「柝」は、毛傳に「柝、滿也」とある。滿ちる意。○「虛業」は、毛傳に「植者曰虞、横者曰柝。業、大版也」とある。「業」は大

板のことで、そこに二本の支柱である「虞」を立て、そこに横木である「栒」を渡して樂器を掛けたのである。○「維」は、王引之が「靈臺曰、虞業維樞、賁鼓維鏞。下維字亦當訓爲與、謂賁鼓與鏞也」(前掲書) と言う如く、「とも二」と讀む。○「樞」は、毛傳に「樞、崇牙也」とあり、「崇牙」は、周頌・臣工之什・有瞽篇の毛傳に「崇牙、上飾。卷然可以縣也」とある。業の上にある牙の形をした飾り。○「賁」は、高亨が「賁、借爲轟、一種大鼓」とする如く、轟の假借字で大鼓を指す。○「鏞」は、毛傳に「鏞、大鍾也」とある。大鍾のこと。○「論」は、余培林が「集傳、論、倫也。得其倫理也。言鼓鐘之排列有序不紊也」と言う如く、鼓鐘の排列が亂れることなく並ぶこと。○「鼓鍾」は、鄭箋に「於是得其倫理乎鼓與鍾也」とあるように、鼓と鍾のこと。尙、「鍾」は、朱駿聲が「鍾、段借爲鐘」と言う如く、鐘の假借字。○「樂」は、演奏する意。○「辟靡」は、集傳に「辟、璧迤。靡、澤也。辟靡、天子之學、大射行禮之處也」とあり、學宮とするが、赤塚忠が「辟雍とは西周王朝時代の最も必要な祀典の聖地であつた。……辟雍は本質的制度的に學校(大學)の母胎であつたが、聖地崩壞の後に學校として意識される」と論ずる。(注一五) 多くの注釋には貴族の學校とするが、本來は神聖な祭場であつた。○「鼉鼓」は、毛傳に「鼉、魚屬」とあり、集傳に「鼉、似蜥蜴、長丈餘。皮可冒鼓」と言い、また境武男は「南方産の『わに』の類の鼉の皮を張つた大鼓」と言う。ワニの類の皮で制作された大鼓。○「逢逢」は、李雲光が「案逢逢、聲也。狀鼓聲之大。蓋假彭字之義」と言う如く、太鼓の大きな音を形容する語。ボンボン。○「矇矇」は、陳奐が「矇矇即矇矇、樂工也。周禮、矇矇、上瞽四十人、中瞽百人、下瞽百有六十人。眡矇三百人。是一瞽矇、一眡矇」と言う如く、盲人の樂官。○「奏」は、陳奐が「奏即金奏也」と言う。鐘や銅鼓等の金屬製の樂器を演奏する意。○「公」は、姚際恆が「公、公庭、毛傳訓事、非。國風云、公庭萬舞。頌云、有瞽有瞽、在周之庭。或云、公庭、或云、庭、或云、公、皆取協韻耳」と言い、有瞽篇「在周之庭」に孔穎達が「毛以爲始作大武之樂、合於太廟之時、有此瞽人、有此瞽人、其作樂者、皆在周之廟庭矣」と言う如く、周の宗廟の大殿にある中院(庭)で、奏樂や舞踊が行なわれる場となる。

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 靈臺を經始し、經營す。庶民之を攻る、日々ならずして之を成す。

第二章 經始するに亟すに勿ざるも、庶民子々來たる。王靈囿に在れば、麀鹿攸に伏す。

第三章 麀鹿濯濯たり、白鳥嚮嚮たり。王靈沼に在り、於切ちて魚躍る。

第四章 虞業と椳、賁鼓と鑄。於鼓鍾を論ね、於辟廡に樂す。

第五章 於鼓鍾を論ね、於辟廡に樂す。鼉鼓逢逢たり、矇瞍公に奏す。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 祖靈の來臨される神聖な靈臺を創建し、測量をして建造します。群衆がこれを作り、何日もかからずに完成しました。

第二章 創建するのに急がせたのではなく、群衆が大勢集まって來て完成させました。祭祀の主宰者である王が靈囿にいと、大きな牝鹿もひれ伏します。

第三章 大きな牝鹿は毛並みも美しく、白き鳥の眞白で美しい。王が靈沼にいと、水面に魚が満ちて飛び跳ねる。

第四章 虞業や椳に樂器を掛けて、大太鼓と大鐘。ああ鼓と鐘を順序よく並べ、聖地辟雍で演奏します。

第五章 ああ鼓と鐘を順序よく並べ、聖地辟雍で演奏します。鼉鼓はボンボンと、盲人の樂官が廟庭で演奏します。

となる。この詩も祖靈祭祀詩である。祖靈の來臨される神聖な靈臺を創建し、辟雍で盲人の樂官樂器を演奏することを諷う詩。第三章では「麀鹿濯濯、白鳥嚮嚮（麀鹿濯濯たり、白鳥嚮嚮たり）」と「鳥」と對で「牝鹿」が見える。「鳥」は、その名稱に關係なく祖靈を指すので、その對となる「牝鹿」も祖靈の對となる神靈或いは、連れ合いである少女の巫祝を

表象したものであろう考える。それ故に、祖靈（男神）の來臨を誘う爲に、祖靈祭祀の獲物には「牝鹿」が選ばれたのである。

(三)

「鹿」が祖靈（男神）を誘う呪物であったのであるならば、「鹿」に扮する儀禮の存在も疑われる。そこで先ず召南・野有死麋篇（二三）を考察する。

第一章 野有死麋。白茅包之。有女懷春。吉士誘之。

第二章 林有撲楸。野有死鹿。白茅純束。有女如玉。

第三章 舒而脫脫兮、無感我帨兮、無使尫也吠。

（押韻 ○||文部 △||幽部 □||屋部 ▲||月部）

以下に語釋を施す。○「野」は、毛傳に「郊外曰野」とあり、郊外のこと。○「死麋」の「麋」は、集傳に「麋、獐也。鹿屬無角」とあり、鹿の類で角のないものとし、江村如圭は「古ヨリクジカト訓ズ。其ノ謂レヲ知ラズ。此ノ物昔年朝鮮ヨリ來ル。韓名ノロト稱ス。水戸侯ノ種ヲ得テ常陸ノ山中ニ放ツ。今其ノ遺種アリト云ヘリ」と言う。和名クジカ、ノロ。尙、蔣立甫は「麋、鹿的別名」(『詩經選注』)と、鹿の異名とする。「死麋」は、死んだクジカ。ここでは、毛傳、鄭箋が死麋の肉とするが、馬瑞辰が「瑞辰按、說文、麗字注云、禮、麗皮納聘。皮蓋鹿皮。又慶字注、行賀人。从心从夂。吉禮以鹿皮爲贄、故从鹿省。白虎通、納徵、玄纁、束帛、離皮。又曰、離皮者、兩皮也。此詩野有死麋、野有死鹿、蓋取納徵

用麋皮之義。……傳、箋並以麋、鹿用其肉、似失其義」と言う如く、死麋・死鹿は、婚禮の結納に用いる麋・鹿の皮を指す。宋翔鳳、(注一七)聞一多も略同じで、更に『儀禮』士昏禮に據り男子が求婚する際の贄に用いる鹿皮とする。○「白茅」は、白い花の咲いたチガヤの意。○「包」は、毛傳に「包、裹也」とあり、陳奐が「釋文、苞、逋茆反。木瓜正義引此詩作白茅苞之。是陸、孔本皆作苞。說文、勺、裹也。勺、本字。古假作苞、今俗作包」と言う如く、勺の假借字でつつむ意。○「之」は、死麋の皮を指す。○「女」は、少女。「白茅」とあることから、水神の尸としての巫女。○「懷春」の「懷」は、毛傳に「懷、思也」とある如く、おもいう意。「春」は、陳子展が「懷春、嚴緝云、懷婚姻。按、此淨化之穢語。猶上汝墳篇怒如調飢、楚辭、天問快鼃飽、以朝餐之飢飽、隱語或暗喻性慾之滿足與否也」と言う如く、嚴粲の『詩緝』の解釋にあるように婚姻を思うとするは、言葉を整えたのであって本義でなく、「飢」「飢飽」の語のように、性欲の満足する意を表す語。(注一九)程俊英等も「春、春情、男女的情欲」と言う。男女の情欲、愛欲即ち性的欲望。○「吉士」は、集傳に「吉士猶美士也」とあり、高田眞治が「吉士は善士・良士の意味もあるが、ここでは美青年のこと。士はここは未婚の男子」と言い、(注二〇)白川靜は神につかえる人、祝(はふり)する。小雅・魚藻之什・白華篇と同様、ここでは、少年の巫である。となると本詩の「女」も少女の巫女と考えられる。○「誘」は、高田眞治が「いざなう。誘惑の誘」と言う。(注二一)第三章を踏まえると、ここでは、少年が少女(女神)を野合に誘う意。○「撲楸」は、馬瑞辰、丁惟汾等は鄭風・山有扶蘇篇に見える「扶蘇」の音轉で扶蘇の小木とするが、これは同篇第二章「喬松」の對になる語、扶桑という名の大木である。「扶蘇」とは別の樹木で、水上靜夫が「近代植物分類學の立場に立つてみると、陸文郁は山毛櫸科の落葉喬木の *Quercus dentata* Thunb. の大型の殻斗(から)が二分の一強包んだ卵圓形の堅果をつけ濟荒用であり、また、樹皮は染料、葉は柞蚕用であるといっている。そして多くの別名を擧げているが、それによると、櫸楸・櫸檀子・構羅・青崗・柞等で、いわゆる『どんぐり』のある樹木名である。……撲楸はその果實を食用・薬用、幹を建築材、樹皮を染料、枝葉を柞蚕飼育・薪材等に用いる。社會的にきわめて用途の廣い樹種である」と論ずる如く、(注二三)「どんぐり」の實のなる木で、和名は境武男が「ブナ科のクヌ

ギ。Quercus dentata Thumb.] と言ふ。(注二四)クヌギで薪の材料とされた。○「死鹿」の「鹿」は、江村如圭が「和名カノシシ又名シカ」と言う。「死鹿」は、第一章の「死麕」と同じく鹿の皮。○「純束」は、鄭箋に「純讀如屯」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、純、屯古通用。……戰國策秦策錦繡千純、高誘注、純音屯、束也。穆天子傳錦組百純、郭璞注、純、正端名。純、束二字同義、純亦束也。周官媒氏純帛無過五兩、與雜記納徵幣一束、束五兩義合、純帛即束帛」と言う如く、純も束の意。また、陳奐は毛傳の「純束猶包之」を受けて「純、亦束也。束、裏同義。傳亦即承上章苞之爲訓」と言う。○「有女如玉」は、何新が「美女、古稱玉女。呂覽貴直高誘注、玉女、美女也。玉色、白色也。鄭箋、如玉者、取其堅而潔白」と言う。(注二五)玉のように眞白く美しい女性をいう。○「舒」は、陳風・月出篇「舒窈糾兮」の「舒」に就いて、馬瑞辰が「舒者、噬之假音。噬通作逝。又作舍……舒者、發聲字、猶逝爲語詞也……舒窈糾兮言窈糾、舒優受兮言優受、舒夭紹兮言夭紹也」と言う如く、發聲の助字で、ああ、さてもこの意。○「而」は、馬瑞辰が「而、當作汝字解、謂吉士也」と言う如く、汝で吉士を指す。○「脫脫」は、三家詩は「媿媿」に作り、馬瑞辰が「瑞辰按、方言、說文、廣雅並曰、媿、好也。玉篇云、媿、好貌。脫脫即媿媿之假借。……脫脫、狀吉士之好貌」と言う如く、媿媿の假借字で吉士のみめよき様を形容する語。○「感」は、錢人龍が「莊子、山木篇、感周之類。釋文引司馬注文選、長笛賦、感迴颺而將頹。七發、夏則雷霆霹靂之所感也。李注並云、感、觸也。亦假感爲撼。感、撼同咸聲」(『讀毛詩日記』無感我媿兮條)と云うに據り、ふれる、さわる意。○「我」は、陳奐が「案上句我字、女子自我也」と言う如く、少女自身を指す。○「幌」は、聞一多が「幌、幌巾也、一曰縞、一曰褱、一曰蔽藪、一曰市、字又作鞞若鞞。……是幌與市、鞞、鞞、亦總爲一物。……案近世社會人類學家咸謂加飾于前、所以吸引異性之注意、是衣服始于蔽前、名曰蔽之、實乃彰之。太平御覽六四五引慎子曰、有虞氏之誅、以幪巾當墨、以草纓當劓、以菲履當則、以艾鞞當官。鞞可當官者、以其爲性器官之象徵也」(『詩經通義甲』)と云う如く、單なる布きれ等ではなく女性器の表象であり、それが次第に女性の身體を指すようになった。「幌に感れる」とは、直譯すれば、スカートの中の陰部(女性器)にさわるという意になる。○「尪」は、毛傳に「尪、狗也」とあり、『說文』に「尪、犬之多毛

者」とある。毛の多い犬で、江村如圭はムクイヌを指し、齊風・盧令篇の「盧」はカイイヌであるという。○「也」は、句中の助字。訓讀では特に讀まない。鄘風・定之方中篇の語釋を参照。(注二六)

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 野に死麕有り、白茅もて之を包む。女有り春を懷ふ。吉士之を誘ふ。

第二章 林に撲楸有り、野に死鹿有り。白茅もて純束す、女有り玉の如し。

第三章 舒而脱脱たり、我が幌わふんぼに感ふれる無かれ、尫かをして吠へしむる無かれ。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 野に死んだクジカがあります。白い花の咲いたチガヤでクジカの皮をつつみます。少女（女神の尸）が一人性的欲望を思い（憂い悶々とし）てます。少年の巫は（悶々としている）少女（女神の尸）を野合に誘います。

第二章 林に（薪をとる爲の）クヌギの木があり、野に死んだカノシシがあります。白い花の咲いたチガヤでクヌギの木とカノシシの皮を束ねます。玉のように眞白く美しい少女（女神の尸）がいます。

第三章 さてもあなたは麗しき御方、（でも）私（女神の尸）の陰部（女性器）にさわらないで、ムクイヌに吠えつかれますよ。

となる。

この詩の詩意をしてみると、毛序は「野有死麕、惡無禮也。天下大亂、彊暴相陵、遂成淫風。被文王之化、雖當亂世、猶惡無禮也」と淫風の詩とし、集傳は「南國被文王之化、女子有貞潔自守、不爲強暴所汚者。故詩人因所見。以興其事而美之」と貞操を守つて男をはねつける女の詩とする。また、毛序・集傳共に召南の詩であるからこの詩に見える女性を文

王の教化を受けた貞女としている。ここで問題となるのは、かかる女性が如何なる存在であったのかである。

集傳は、この詩の第一章と第二章を「興也」とするが、先の小雅・魚藻之什・白華篇を踏まえれば、「野有死麕、白茅包之」「林有撲斃、野有死鹿。白茅純束」が興詞であると考えられる。これに就いては、王政が

在詩經中、植物纏附在一起是婚愛行爲的典型意象。小雅、白華寫道、白華菅兮、白茅束兮。之子之遠、俾我獨兮。
と言ひ、束ねる、包むというのは、纏うのと略同じであり、また纏うにことに就いても

攀附類植物（女夢、菟絲、葛藤）作爲中國人婚媾生活的表象、……在醫學文化及志怪神話傳說中、女夢、菟絲、葛藤也都具有一些與女性有關、與兩性生活及繁育有關的記載。

（注二八）
と言ひに據れば、男女の生活や繁育に關するものであるが、筆者は、男女の歌垣での性行爲を指すのではないかと考える。ここで「鹿皮」と男女の性行爲と如何なる關係を有するのかが問題となる。

「鹿」は、古く金文では命簋に「王易（賜）命鹿」、貉子卣に「王令衛（道）歸（饋）貉子鹿三」とあるように、賞與の對象（注二九）として珍重されていた。ここで具體的に、祭祀に於いてどのように用いられていたのかが問題となるが、例えば、我が國にも古く、『萬葉集』卷一六には

彌彥神の麓いひひこにかむじ今日らもか鹿の伏すらむ 裘かほろも着て角つの付きながら（三三八八四）

（注三〇）
とある如く、祭場で鹿皮を纏うことは神と一體となることであつた。要するに、「鹿皮」は、婚姻の禮物とあるが本來は祭祀に用いられる呪物であつた。

小雅・魚藻之什・白華篇（二二一九）の第一章、第二章に

第一章 白華菅兮、白茅束兮。之子之遠、俾我獨兮。

第二章 英英白雲、露彼菅茅。天步艱難、之子不猶。

〔訓讀〕

第一章 白華の菅、白茅を束ぬ。之の子之れ遠ざかり、我をして獨りならしむ。

第二章 英英たる白雲、彼の菅茅を露ほす。天の歩け艱難にして、之の子猶からず。

〔日本語譯〕

第一章 (少年の巫は) 白き花咲くカヤは、白き花咲くチガヤで束ねます。あの御方(水神の尸たる少女)は遠ざかり、我(少年の巫)を一人にさせます。

第二章 眞白き白雲は、カヤとチガヤをじつとりと濡らします。天の助けは困難を極め、あの御方(水神の尸たる少女)は私(少年の巫)に振り向いてくれません。

(注三二) とあるのと同様、少年の巫が少女が水神に扮する爲に用意せねばならぬ呪具である。召南・野有死麕篇「鹿皮」を着用するのは、少女であるから「鹿皮」を白い花の咲いたチガヤで包む呪的行爲は、少女が水神に扮する爲の呪具を造る或いは水神であることの證とする行爲であると見なければならぬ。その直後に「女有り春を懷ふ。吉士之を誘ふ」とあることから、少女(水神の尸)との性行爲を承諾する爲の呪物であつたので、少年の巫が用意しなくてはならなかつたのである。また、目加田誠が「禮記郊特性に大羅氏が『鹿と女とを致す』とあるように、凡そ鹿と女との聯想は許されると思ふ」と、鹿が女性を表すというのは、恐らくは、古來、鹿が神聖な動物であるばかりではなく、女性が專屬で扮していたことにも起因するのであろう。「鹿皮」を纏うのは女性であり、憑依した神靈は女神となるのである。

更に述べるならば、野有死麕篇では、少女が「鹿皮」を着るとは謠われていないが、第二章「女有りて玉の如し」と、

玉のように眞白な少女とあるのは、陳風・月出篇で水神の尸となる少女が月に照らされて眞白に輝くのと同様に、水神が少女に憑依したことを表すのである。従つて、詩意は、少年が水神の來臨を言祝ぐ詩と解せられるのである。

さて、ここで問題となるのが第三章の關係であろう。第三章に就いては、顧頡剛が「這明明是一個女子爲要得到性的滿足、對於異性的懇摯的叮囑」(注三三)と云うのであるが、少女が少年に性欲が満足したことを懇ろに伝えることを云うのである。これは、少年と水神の少女との性行爲で少女が満足し、少女から水神が離れて去っていくことを指すのである。末句に「扈をして吠へしむる無かれ」とあるは、水神がもう私に性行爲をしてくれるな、という意が含まれるのであろう。歌垣の場では、一人の女性に對し、多數の少年が男根を持つて待つている姿が畫像石が見え得ている。何新が「本詩是一首關於野合的情詩」(注三四)と云うのが略正しく、本來は、歌垣の場で、水神の來臨を言祝ぐ詩とあつたと見るべきであらう。

(四)

上述の如く、召南・野有死麕篇では、水神に扮する爲の呪具として鹿皮が見えていたが、實際に巫祝が着用してはいない。そこで、より具體的に、鹿に扮する儀禮である鹿舞に就いて觸れておきたい。

我が國の例として、『萬葉集』卷一〇には

さ雄鹿の妻呼ぶ山の岡邊なる早稲田は刈らじ霜は降るとも (二二二〇)

とある。雄鹿が妻、即ち雌鹿を呼ぶのは、歌垣の場に於いて、少年が相手の女性を探し求める行爲と同じであると考えられるのである。こうした、雌鹿に扮した少女が舞うことを謠った詩が周南・麟之趾篇 (一一) である。

そこで、周南・麟之趾篇 (一一) を考察する。

○「定」は、毛傳に「定、題也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、説文、題、頤也。顛、題一聲之轉。爾雅、顛、題也。又、顛、頂也。説文、顛、頂也。頂、顛也。定即頂之假借」と言う如く、頂の假借字で、ひたいたいのこととなる。

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 麟の趾、振振たる公子、于嗟する麟よ。

第二章 麟の定、振振たる公姓、于嗟する麟よ。

第三章 麟の角、振振たる公族、于嗟する麟よ。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 牝鹿の足つき、見目麗しい子孫（の少女）達、舞い踊る牝鹿（少女）よ。

第二章 牝鹿のひたい、見目麗しい子孫（の少女）達、舞い踊る牝鹿（少女）よ。

第三章 牝鹿の角、見目麗しい子孫（の少女）達、舞い踊る牝鹿（少女）よ。

となる。

この詩の詩意を見てみると、毛序は「麟之趾、關雎之應也。關雎之化行、則天下無犯非禮。雖衰世之公子、皆信厚如麟趾之時也」とし、集傳もほぼ同様に「文王后妃德脩于身。而子孫宗族。皆化於善。故詩人以麟之趾、興公之子言。……序以爲關雎之應、得之」とする。關雎は后妃の徳であり、世の中がその徳に化せられて麟とでも言うような公子公族があるのだとする。また、ここで關雎云々とあるが、これは周南は關雎篇で始まり、麟之趾篇で終わるものであるとする説が根底にあるからであつて、目加田誠が「詩の配列編纂にそこまで意味を考へ得るか否かは疑問である」とする如く、配列順にそのまま従つて詩篇を解釋するのは問題がある。本詩は、境武男が「野外での祭祀行事。そのおりの『鹿踊り——しし

(注三八)

おどり』の『鹿』——舞人——の讚美」と言う如く、鹿舞の詩である。古來、鹿も獅子と呼ばれていたのであり、鹿舞は獅子舞とほぼ同じ性質の舞である。(注四〇)

我が國でも古く獅子舞に被る假面は龍頭とも呼ばれ、雨乞い、風祭、作祭を意味する豫祝儀禮であつた。(注四二)鹿が龍と同様に水神の表象であつたのである。つまり、鹿に扮することは、龍に扮することと同様で水神になる爲の呪的行爲なのである。中國の獅子舞に就いて永尾龍造が

獅子舞ひにも、支那の北方と南方とでは、其の形式に非常な違ひがある。……南方の獅子舞の一例として廣東省翁源地方の獅子舞ひに就いて見ると、その期間は大概四日から十五日までで北方と同じことである。十五日を過ぎると、人々皆それぞれの仕事が始まつて誰も見物するものもなく、従つて祝儀を呉れるものもなくなるのである。然し遠地からやつて來る江西獅といふのは別のやうである。

この地方の獅子舞ひの北支那の方と異なる點は、北支那の方は只舞ふことだけに熟練したものが之に従事するのであるが、此の地方のは拳術や棒術をする人間が之に従事することであるから、従つて舞ひ振りや動作に異點があるのである。其の人数は七人から十四人までである。皆同じ仕立ての服裝で刀や棒などを皆揃ひのものを用ひ、威勢のよいものである。これ等の連中はみなそれぞれ猫頭獅、狗頭獅、雞公獅、斗牛獅などいふ獅子頭を持つて、それ等はみな繪の具で、眼口鼻などを巧みに畫き、色絲や雉の尾や、獸の毛などで飾り立て、頗る美しいものである。

……(中略)……

獅子舞ひは通常二人でやるもので、一人は前にあつて獅子頭をすっぽりと被り、兩手で下頷を持つて動かす。これが立上つて歩くと、獅子が昂然と頭を擧げて行く恰好になる。他の一人は獅衣を被つて獅子の身體の部分になる。これは前屈みになり、頭の前の人の腰の邊につけ、片手で前の人の帯を握り、片手は後に廻はして尾の棒を握り、これを前後左右に動かす。……これは丁度龍燈の龍頭を持つ者と同じ様に苦しい仕事で、中々これになる者が無い。……

獅子舞ひを盤といつて頑と云はないのは、其の舞ひ方がたゞ地に據つて盤磚し、左右に播動するのみで、頑龍の自由に飛び騰り、自由に走り廻るやうな動作と異つてゐるからであるといふ。

以上述べた頑龍と盤獅とは燈中の要物で、この二つで燈彩の要件は具備されたとも云へるから、他の物は無くとも差支がない。頑龍と盤獅とは少しく禁忌事項がある。先づ此の二者が共に路を行く際には、龍が前で獅子は後と決まつてゐる。

(注四三)
と斷じている。獅子舞と龍燈(龍の舞)とが、その性質に於いて酷似しているのである。ただし、周南・麟之趾篇では少女が牝鹿に扮していることに違いはあるが後述する如く、女性も獅子舞に参加していたことから、或いは女性がその中心として、舞うものもあつたのではなからうか。

(五)

巫祝が「鹿」や「虎」に扮するのは、水神になるためであつたが、それら所謂「虎舞」「鹿舞」「獅子舞」と同様に狼に扮する儀禮が野有死麋篇の第三章に女神とに扮した少女に性行爲を迫る少年として狼が見える。それと同じく、少年が扮する狼が謡われている詩が豳風・狼跋篇(一六〇)である。

そこで、豳風・狼跋篇(一六〇)を考察する。

- 第一章 狼跋其胡、載寔其尾。△
第二章 狼寔其胡、載跋其尾。□

(押韻) ○||魚部 △||微部 □||脂部 微・脂部は合韻

以下に語釋を施す。○「狼」は、和名オオカミ（江村如圭）。ここでは、後述するオオカミの姿に扮した少年の巫。○「跋」は、馬瑞辰が「瑞辰按、説文、躡、跋也。跋、躡也。躡跋經傳多假作顛沛。毛傳、顛、仆也。沛、拔也。拔與跋同」と言う如く、つまり倒れる意。大雅・蕩之什・蕩篇の第八章に「顛沛之揚」とある「顛沛」と同様に倒れる意。○「胡」は、集傳に「胡、頤下懸肉也」とあり、頤の下の垂れる肉の意。程俊英等は「老狼頤下垂着的肉袋」と、頤の下の肉袋であるという。○「載」は、『助字辨略』に「語辭也。……詩、周頌、載用有嗣、朱傳云、載、則也。愚案、則亦辭也」とある。「すなはち」と讀む助字。○「憲」は、韓詩は躡に作り、毛傳に「憲、跲也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、爾雅、憲、跲也。憲、仆也。憲與躡通。説文、躡、跲也。引詩載躡其尾。廣雅、躡、頓也」と言う如く、躡の假借字でつまり倒れる意。孔穎達は「躡即憲也。然則跋與憲皆是顛倒之類」と言う。○「公孫」は、俞樾が「爾風自破斧以下諸篇、破斧明斥周公、伐柯則云之子、九罭則云之子、又云我公、皆明斥周公」(『茶香室經説』)と、周公を指すとするのは誤りであるが「之子」と同義とするのは略正しい。例えば、伐柯篇の第二章「我觀之子」の「之子」に就いて、集傳に「之子指其妻而言也」とある如く、新郎がその妻を指す語として見え、九罭篇の第一章「我觀之子」の「之子」もやはり女性を指す語である。また周南・麟之趾篇の集傳に「公姓、公孫也」とあり、麟之趾篇での「公姓」は牝鹿(女神)に扮した少女の巫女を指すことから、本詩の「公孫」も女神の尸たる少女と考えられる。○「碩膚」は、毛傳に「碩、大。膚、美也」とあり、丁惟汾が「碩大雙聲。膚美雙聲」と言い、袁梅が「大美。甚美」と言う如く、非常に美しい意で、「公孫」を形容する語。○「赤舄」は、小雅・南有嘉魚之什・車攻篇の第四章に「赤芾金舄」とあり、袁梅が「金舄、即赤舄、黃朱色の複底鞋」と言う如く、赤舄は金舄とも言い、黄色を帯びた赤色の二重底の靴。尚、『酉陽雜俎』續集卷一(注四)には、一人の娘が翠紡の上衣に金の靴を履き祭に行く。その靴はとても軽くて毛のようで石を踏んでも音を出さないものという物語がある。これを踏まえると、恐らくは金でできた靴ではないようであり、祭祀用の女性の靴であると考えられる。また車攻篇

では、儀禮を行う青年の祭服の一部として見えている。○「几几」は、馬瑞辰が「廣雅、几几、盛也。詩蓋以狀盛服之貌」とあり、唐莫堯が「銅錫合金所做鞋頭飾物美盛貌」と、靴の青銅の飾りが美しく盛んな様とするが、靴全體の美しさを形容する語。○「德音」の「德」は、お恵みの意。「音」は、「こころ」と讀む意味の無い助字。小雅・甫田之什・車牽篇の語釋參照。○「瑕」は、馬瑞辰が「瑞辰按、瑕、假古通用。爾雅、假、已也。思齊詩烈假不瑕、箋、瑕、已也。正義以爲釋詁文。是假通作瑕之證。德音不瑕、瑕王當讀假、訓已、猶南山有臺詩云德音不已也」と言う如く、假の假借字でやむ意となる。

以上の語釋を踏まえて訓讀すると

第一章 狼其の胡に跋つすき、載すち其の尾つしに蹇つすく。公孫碩膚として、赤烏几几たり。

第二章 狼其の胡つすに蹇つすき、載すち其の尾つしに跋つすく。公孫碩膚として、德音こころに瑕やまず。

となる。

以上に據つて日本語譯にすると

第一章 オオカミ（に扮した少年）は顎下の肉袋に躓つき、尾にも躓つきました。少女（女神の尸）は見目麗しく、その（少女が履く）靴は美しい。

第二章 オオカミ（に扮した少年）は尾にも躓つき、顎下の肉袋に躓つきました。少女（女神の尸）は見目麗しく、（女神の）下されるお恵みは盡つきることがありません。

となる。

この詩の詩意を見てみると、毛序は「狼跋、美周公也。周公攝政、遠則四國流言、近則王不知。周大夫美其不失其聖也」とし、集傳も「周公雖遭疑謗、然所以處之不失其常。故詩人美之」と、周公を贊美する詩とするが誤り。境武男が「はげしくあばれる狼と相對する高貴な人物。狼は人におそいかかる恐ろしい野獸。平素は人里では見かけない。その狼が、い

ま多くの人の目の前で狂ったような動作をする。そして、盛装した男——貴公子のさまをした男が、その狼と相對している。ということ、この狼はほんものの狼ではないからである。人におそいかかるでもなく逃げようともしない。幽地方では、あるいは狼は神獸とされていたものと見られる。その神獸とされる狼、ここでは假装した狼であるが、はげしく動作する。それをとりしめようとするかに見える貴公子は、ある遊藝人であるが、古くは聖職者であったのである。つまりこの詩は『狼踊り』の描寫である。なおこの詩の篇義について、早く目加田誠氏によつて、『こういう歌にはむしろ私は何かおかし身ぶりの舞踊を想像するのである』という想像説が提示されている。ただ『おかしな身ぶりの舞踊』という表現は適切でない(注四七)と斷じている。狼は、舞人を指すのであり、また、赤塚忠が

狼跋篇は、狼の多い地方のものであるが、上古の氏族集團の祭禮の歌謠ではないであろう。それよりも一般化され、藝能化されていると思う。ところで、この狼の扮装が獅子舞の唐獅子(からし)のそれになるであろう。わが國の民間藝能の獅子舞は、複數の獅子が舞うものが多く、舞も多様であり、また曲藝をまじえており、先導役・道化役などの陪伴者も多く、また、獅子そのものが惡靈を拂つて善靈を齎す(もたら)とされているものが多い。しかし、現代中國の民間藝能の獅子舞にも、いわゆる唐獅子の群舞・曲藝があるとともに獅子退治を演じているものもある。わが國でも、平安朝末期の『信西古樂圖』には、棒形の武器を持った人が大きな唐獅子に綱をつけて引いて行くさまを描いている。してみると、狼跋篇のような惡獸退治が獅子舞の原形であつて、中國も、わが國でも、その演舞の興味を多くして、それが復雜化し、また公孫が先導役・道化役となつて、陪伴者を多くしたと考えられるのである。

(注四八)と斷ずる。狼に對する恐怖は、世界共通のことであるが、とりわけ西洋では狼の食人行爲が男性が女性に對する性行爲の表象として扱われている。本詩は、狼に扮しているのは少年であり、女神(水神)の來臨を求める詩である。狼ではないが近似の動物では、召南・野有死麋篇(二三)、第三章では「舒而脫脫兮、無感我睨兮、無使尫也吠(あなぢ)」が睨(あなぢ)に感れる無かれ、尫をして吠へしむる無かれ」とヌクイヌに扮した少年が少女の性器を觸らんとする様子が諺われ

ている。狼等に扮する少年が少女に對して性的行爲を求めようと迫る詩であり、鹿舞・獅子舞にも見られ、我が國の獅子舞は三匹の獅子による舞が多く、女性の扮する鹿を牝獅子と呼び、牡獅子と牝獅子との交尾の模倣儀禮として性行爲が行われたのである。これは、歌垣の場に於ける性的結合（野合）と同じで、豐饒を祈願することを目的とした呪術的行爲である。

（六）

中國では古來より「鹿」が珍重されていた。その食糧から儀禮用の供物に至るまでその用途は廣い。當初こそ狩獵の獲物であったが、民族が集團を形成するに従い、食糧としての獲物だけではなく、宗教儀禮の供物として扱われるに至った。

秦風・駟驥篇（二二七）、小雅・南有嘉魚之什・吉日篇（二八〇）では、祖靈祭祀には牝鹿が祖靈への供物として謠われていた。一方で、大雅・文王之什・靈臺篇（二四二）も祖靈祭祀ではあるが、「白鳥（祖靈）」の對の語として「麀鹿（牝鹿）」が謠われている。特に、祖靈（男神）であったので、その對となる「鹿」も女性（少女の巫祝）を象徴するものである。こうした「鹿」＝女性という考えが、「鹿」に扮する儀禮へとその變遷を辿ることになる。

召南・野有死麋篇（二三）では死んだクジカの皮、周南・麟之趾篇（一一）では牝鹿に扮した少女、即ち女神（水神）となり、召南・騶虞篇（二五）では、騶虞（白虎）が女神（水神）として見え、豳風・狼跋篇（一六〇）では、狼に扮した少年とそれに迫られる少女（女神）が謠われている。これらの詩には、「鹿皮」が女神の尸たる少女の巫祝が纏う呪物として見え、少年の巫が少女の扮する女神を性行爲に誘うという歌垣の詩であった。また、祭禮に伴う巫舞は「鹿舞・獅子舞・虎舞」であり、この中で、少年の扮する狼と女神の舞は、共通として女神（水神）の尸としての少女が主體として舞い踊る内容となっている。これら動物に關する巫舞は、特に鹿・狼などの性的行爲に關連が強く、交尾の様子が模倣され

て舞へと發達していったのであろう。

これら巫舞の目的は、「牝鹿」の多産や繁殖力の強さから、類感呪術的に豊饒多産を祈る呪物として『詩經』に謠われたのである。後世、叙上の呪物としての機能が忘れ去られ、『搜神後記』卷九などに見られる如く、「鹿」が少女に化け、男性を誑かすといった傳承へと發展していくのである。

注

- (注一) 「白馬と賓客―有客・白駒の詩をめぐって」(『京都女子大學紀要』第一七號 一九五八年所收) 六三頁、「祖靈祭祀に就いて」(『詩經』の原義的研究)(研文出版 二〇〇四年) 所收) 三二六―三五二頁、「歌謠の發生形態」(『詩經研究』(赤塚忠著作集第五卷 研文社 昭和六一年) 所收) 七八―七九頁。
- (注二) 赤塚(注一) 前掲書所收「かささぎのわたせる橋―振鷺の舞と鳥の『興』―」三六九―四五二頁、家井(注一) 前掲書所收「『王事靡盬』に就いて」四四四―四六八頁、「興詞に謠われた黄鳥」(『詩經』興詞研究)(研文出版 二〇一二年) 所收) 一七五―二二七頁。
- (注三) 金田(注一) 前掲論文、赤塚(注一) 前掲書所收「魯頌の構成について」三四五―三五二頁、家井(注一) 前掲書所收「祖靈祭祀に就いて」三四〇―三四八頁。
- (注四) 家井(注一) 前掲書所收「魚の興詞」一八五―一九五頁。
- (注五) 赤塚(注一) 前掲書「魯頌の構成について」三五五―三五六頁。
- (注六) 金田(注一) 前掲論文参照。
- (注七) 小雅・鹿鳴之什・鹿鳴篇の訓讀・日本語譯は、拙稿「『詩經』に於ける『逍遙』と『翱翔』に就いて―齊風・載驅篇の解釋を中心として―」(『二松學舎大學論集』第五九號 平成二八年所收) を参照。
- (注八) 「靜女」に就いては、拙稿「『詩經』靜女攷」(『二松學舎大學論集』第五四號 平成二三年所收) を参照。
- (注九) 「尹人」に就いては、拙稿「『詩經』好人攷」(『二松學舎大學 大學紀要』二七集 平成二五年所收) を参照。
- (注一〇) 「狐」に就いては、拙稿「『詩經』に於ける『狐』『狐裘』に就いて」(『二松學舎大學論集』第五八號平成二七年所收) を参照。
- (注一一) (注一) を参照。
- (注一二) 拙稿「『詩經』に於ける『逍遙』に就いて」(『二松學舎大學 東アジア學術總合研究所集刊』第四六集 平成二八年所收) を参照。
- (注一三) 「女子當兵和服徭役」(『史林雜識初編』(一九六三年 中華書局) 所收) 九五頁。
- (注一四) 赤塚忠「殷王朝における『土』の祭祀」(『中國古代の宗教と文化』(角川書店 昭和五二年) 所收) 一九六頁。
- (注一五) 赤塚忠「辟雍について」(『中國古代文化史』(赤塚忠著作集第一卷 研文社 昭和六三年) 所收) 五一六―五一七頁。
- (注一六) (注一) を参照。

- (注一七) 『過庭錄』卷七(學術筆記叢刊、中華書局 一九八六年) 一二二頁。
- (注一八) 「詩經通義乙」(『聞一多全集』四、詩經編下(湖北人民出版社 一九九三年) 四九〇〜五〇頁。
- (注一九) 曹風・候人篇の第四章に「婉兮變兮、季女斯飢」とある。尙、曹風・候人篇の詳しい解釋に就いては、拙稿『詩經』季女攷』(『二松學舎大學論集』第五六號 平成二五年所收)を参照。
- (注二〇) 『詩經(上)』(漢詩選一、集英社 一九九六年) 九三頁。
- (注二一) 『詩經I』(白川靜著作集九、平凡社 二〇〇〇年) 六五頁。
- (注二二) 高田(注一〇) 前掲書。
- (注二三) 『中國古代の植物學の研究』(角川書店 一九七七年) 二六五〜二七四頁。
- (注二四) 『詩經全釋』(汲古書院 一九八四年) 八八頁。
- (注二五) 『風與雅』(『詩經』新考)上(何新國學經典新考叢書、中國民主法制出版社 二〇〇八年) 一〇九頁。
- (注二六) 鄘風・定之方中篇の詳しい解釋は、拙稿『詩經』秦風・車鄰篇に見える寺人に就いて』(『二松學舎大學東アジア學術總合研究所集刊』第四三集 平成二五年所收)を参照。
- (注二七) 『詩經』中の『纒附』意象』(『詩經』文化人類學(黃山書社 二〇一〇年) 所收) 一〇六頁。
- (注二八) 王政(注二七) 前掲書一二三頁。
- (注二九) 中國の經書で言う『周禮』に相當する我が國の『延喜式』にも祭祀の供物として「鹿皮」が供されることが多く記載されていることからも窺えよう。
- (注三〇) 『萬葉集』卷三の「大伴坂上郎女の、神を祭りし歌一首」に「ひさかたの 天の原より 生れ來たる神の命 奥山の賢木の枝に しらか付く 木綿取り付けて 齊登を 齊ひほりゑ 竹玉をしじに貫き垂れ 鹿じもの 膝折り伏して たわやめのおすひ取りかけ かくだにも 我は祈ひなむ 君に逢はじかも(三七九)」と、膝を折って祈る姿を鹿に喩えている。
- (注三一) 小雅・魚藻之什・白華篇、第一・二章の訓讀・日本語譯は筆者の見解に據るものである。紙數の都合に據り語釋は省略した。
- (注三二) 『詩經』譯注篇(丁字屋書店 一九四九年) 八九頁。北宋の歐陽脩も、「麋体」を女體の喩えたもの(『詩本義』卷二)とする。
- (注三三) 『古史辨』第三册(海南出版社 二〇〇五年) 二七九頁。
- (注三四) 何新(注二五) 前掲書一〇八頁。鹿と性行爲に就いては、ジャン・ポール・クレベール著・竹内信夫等譯『動物シンボル事典』(大修館書店 一九八九年) 七四頁、おじか條を参照。
- (注三五) 境(注二四) 前掲書五〇頁。
- (注三六) 境(注二四) 前掲書五一頁。
- (注三七) 福本(注二) 前掲書五三九頁。
- (注三八) 目加田(注三三) 前掲書五一頁。
- (注三九) 境(注二四) 前掲書五一頁。

(注四〇) 獅子舞が鹿舞であることに就いては、「獅子舞考」(『定本柳田國男信全集』第七卷(筑摩書房 昭和三七年) 四四七〜四四八頁)を参照。また出石誠彦が「支那の古文獻に現はるゝ麒麟について」(『支那神話傳説の研究』増補改訂版(中央公論社 昭和四八年所收) 一六三〜一八六頁)で「白邪」と「麒麟」が信く同じ瑞獸とされ、「麒麟」とは、本來は鹿の崇拜をその起原とするものであり、それが後世靈獸として神格化したものである。その過程で角が加えられ鹿とは別の形状となったと論じている。

(注四一) 古野清人『獅子の民俗―獅子舞と農耕儀禮―』(民俗民藝叢書32、岩崎美術社 一九六八年) 六一頁。

(注四二) 古野(注四一) 前掲書二〇一頁。

(注四三) 『支那民俗誌』第二卷(國書刊行會 昭和四八年) 四二二〜四二六頁。

(注四四) 段成式『酉陽雜俎』續集卷一、支諾阜上(和刻本漢籍隨筆集第六集、汲古書院 昭和四八年) 一八〇〜一八一頁。この記事は、唐代の文獻であるが「秦漢前有云々」とあるに據れば、相當古い傳承であろう。なお、南方熊楠が『酉陽雜俎』續集卷一に、支那のシンデレラ物語あるを見出し、備忘録に記しておき、その後土宜法龍師などに報せしことあり。……歐州シンデレラ物語の最も古きは、何時代に記されたるをつまびらかにせず。したがって、この譚の早く筆せらしは、東西いずれにあるを斷ずるあたわずといえども、とにかく、千餘年前に成りし『酉陽雜俎』に、この特色あるシンデレラ物語を書きつけたる、唐の太常卿、段成式の注意深かりしを感謝するものなり。……段氏決して全く虚構して『酉陽雜俎』を著わしたるに「西曆九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」(『南方熊楠信集』2、平凡社 昭和四六年) 一二九〜一三五頁)と、最古のシンデレラ物語であり、全くの虚構ではないと論ずる。

(注四五) 車攻篇に就いて、赤塚忠は「春 嬾の魄祭りに奉仕する幌隅を讚える……狩獵の魄祭りの詩である。……第一章・第二章では春 嬾の出で立つさまを肯べ、第三章・第四章では、魄祭りに奉仕する青年とその従者を選定することを敘し、第五章・第六章では、その先驅するさまを敘し、第七章・第八章では、その先驅する青年を頌讚している」(注一) 前掲書一七二〜一七三頁)と論ずる。

(注四六) 小雅・甫田之什・車螯篇に就いては、(注九) 前掲論文を参照。

(注四七) 境(注二四) 前掲書三七六〜三七七頁。

(注四八) 赤塚(注一) 前掲書七四〜七五頁。

(注四九) ジャンポール・クレベール(注二〇) 前掲書六八頁、おおかみ條を参照。

(注五〇) 古野(注四〇) 前掲書一九六〜一九七頁。また、菊池和博は「三頭のシシ踊りが傳播する以前に、東北地方の村々に多頭シシ踊りを成立させるだけの背景や要因があったことが考えられるのである」(『シシ踊り―鎮魂供養の民俗―』(岩田書院 二〇一二年) 三四四頁)と論じている。

※右記の他に使用した『詩經』工具書は、拙稿『詩經』鄭風・山有扶蘇篇の『狡童』に關する一考察(二松學舎大學 大學院紀要『二松』第二八集 平成二六年所收)を参照。